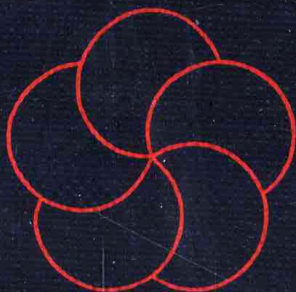
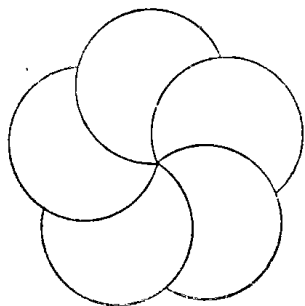


5

日本文学の歴史



愛と無常の文芸



5 愛と無常の文芸

日本文学の歴史

角川源義 杉山 博 編

日本文学の歴史 (全12巻)

第5巻 愛と無常の文芸

昭和42年9月20日 初版発行

定価 650 円

編者 角川源義
杉山博
発行者 角川源義

印刷所 中光印刷株式会社
製本所 株式会社 鈴木製本所
製版所 株式会社 高木写真製版所
発行所 株式会社 角川書店

東京都千代田区富士見2-13
振替東京195208番
電話東京(265)7111番

© Printed in Japan

落丁・乱丁本はお取り替えいたします

目次

争乱期の影像

争乱の予兆　平家の三女性　美人薄幸　資盛と右京大夫　暗雲低迷　占京荒れ、新都成らず　紅旗征伐、下非吾事　『地獄草紙』の世界　うたかたの恋　末世無常と西行　有為転変　右京大夫の嘆き　訴えの歌

九

西行と俊成

主役交替の時代　西行のおいたち　「重代の勇士」西行　西行出家　保元の乱と崇徳院西行の旅　西行と文覚　勸進聖西行と頼朝　西行の歌境　西行の歌論　西行の交友圈花の下にて春死なむ　大原三叔と俊成　俊成のおいたち　俊成の恋歌　幽玄の論　『千載集』の世界　幽寂と哀艶　九十年の生涯

三

隠者の生活

遁世者長明　その半生　隠者のパトロン　説話集のライター　『宝物集』の著者　草庵の世俗化　艶隠者西鶴　「わび」「さび」の発生　文芸の伝播者高野聖　語りものの文芸の成立

三

盲僧の田舎わたらい

七

座頭のボサマ 東西の盲人 祭りのうつりかわり 四宮河原の積塔
家語り 平曲の流派 田楽の流行 白拍子の芸能 成長する芸能 琵琶法師の誕生 平

平家物語の誕生

三

映画的手法 報道の場 生きている絵解 絵解の変貌 琵琶の旋律 作者と語り手
語変貌の主役 成長する『治承物語』 スポンサー慈円 行長平家 軍談として口演 天物
才明石覚一

滅びの詞章

三

平曲のふるさと 瀬戸内海と平家 栄華のかけに 頼朝率兵 木曾の三日天下 一の谷・
屋島 壇の浦海戦 大原叔光院

末世の歴史意識

四

『今鏡』の世界 『愚管抄』と慈円 宝剣の紛失 三神の約束 百王思想と神国思想 南
朝正統論 ライバル近衛家 慈円の現代史 錦の御旗 はずれた子見と失敗の史論

唱導の文芸

六

水脈を尋ねて 貴族社会の説経 二つの唱導方式 美貌で美声 何が語られたか 安居院
登場 澄憲の舌三寸 尼くだり事件 濁世の富楼那 唱導のテキスト ゆれうごく説話

旅する和泉式部 興味本位の説経へ 教団から離れる唱導

後鳥羽院

治承の秋 平家の余風 兼実と通親 『千載集』と俊成 少年天皇の元服 九条家歌壇と
六百番歌合 建久の政遷 讓位 復古の悲願 正治百首と千五百番歌合 和歌所 『新
古今集』の成立 孤立の感情 蒙遊の陰の焦燥 承久の乱 孤島の詩心 最後の怨念

新古今の世界

復古への夢 独特な古典愛 酷愛した三大古典 余情的表現 本歌取の秘密 多様の統一
気品のある美 妖艶美の実体

禅林到来

馬を引く義経 東国武士の文体 東国武士の教養 片手の出す音 不立文字の文学 ひた
すらかな座禪を

鎌倉武者の文芸

頼朝鎌倉にはいる みちのくの浄土 挨拶じょうずの人 統領の歌 実朝と宇都宮氏 信
生法師の旅路 東国の歌謡 製作の背景 宴曲の作者 流伝の系譜 宗教文芸の一路線
花開く学芸 金沢文庫

藤原定家

西行・俊成以後 似絵の名手隆信 俊成の継承者 定家のおいたち 定家と式子
古典事業 定家と鎌倉幕府 承久の乱以後 定家の有心論

一座の風雅

二八四

有心対無心の連歌合戦 柿本・栗本の由来 連歌の道の縁起 機知の応酬 短連歌成立のころ
鎖連歌成立のころ 賦物と物名歌 遊戯の系譜 後鳥羽院の御句流るる如し 衣更え
する連歌 老後の数奇 その後の上手たち 建治式目以後

救世の声

三〇八

亡国の念仏 念仏三昧 若き日の法然 専修念仏の世界 流浪する親鸞 村々のお堂
お堂の文学 親鸞の消息 センダラの子日蓮 立正安国論 辻説法 日蓮
の法難 結束する信者 はねばはね 時衆の登場

耳の文芸

三三六

裸の男 ハナン 時代の影 説話から説話集へ 『宇治大納言物語』の流れ 『古事談』
『続古事談』 当世風の類聚 『宇治拾遺物語』 『十訓抄』 修身のような説話 『古今
著聞集』 興言利口の編 一所懸命 蒙古襲来のこと 道理の季節 無住の情

ロマンの黄昏

三六二

花やかな終焉 物語の太陽 古典物語の享受 もとには劣るわざ 『松浦宮物語』 現実
逃避の姿勢 王朝回顧の退廃 デカダンスの極点 武士の登場 家の年譜 説話の影
模倣からさらに模倣へ 物語の白書 とはすがたりの序章 危険な関係 真実の文学

歌の家

三代目為家の迷い 吳越同舟の撰者 阿仏尼の執念 波乱にみちた為兼の生涯 御子左家の
不和 貴重な謀臣 佐渡へ配流 「玉葉」の単独編集 中世の美意識 多彩な京極派
孤独な晩春

三八八

東海道の旅

頼朝の上洛 近づいた京・鎌倉 隠者の旅 働く農民 にぎわう宿駅 女の旅 二条の
東下り 袋の中の鎌倉 鎌倉のさかえ

四二四

日本の論語

兼好の「ふるさと」 堀河家の兼好 「思い出」の時代 「無常」時代 遁世する兼好
兼好の生き方 兼好の「旅」 新しい文化人 兼好の「愛童」 ほんとうの「兼好」 「徒
然草」の家 「徒然草」の執筆 「帝王学」の書か すばらしい教養書 豊富な「内容」
「法律」の見方 不安だった「暦」 「食物」と人生 「容貌」と実相 おどけた「話題」
「迷信」と生活 「警察」のあり方 盗賊の本質 恋愛と「結婚」 「医師」への批判 「性
的生活」にも 兼好だけではない 万人の文学 新時代の先駆者

四三四

参考文献

日本文学年表

あとがき

四六二
四六四
四七三

本巻執筆者（五十音順）

渥美かをる 大島建彦 角川源義 小松操
篠弘 嶋田鋭二 島津忠夫 新聞進一
杉山博 谷山茂 辻彦三郎 永井義憲
益田宗 三谷栄一 武者小路穰 安田章生

本巻協力者

浅野喜一 伊藤延男 入江泰吉 岩瀬博 梅原猛
河岡武春 久保田淳 斎藤正二 佐々木巧一 白井永二
信太 周中西 進 芳賀日出男 福田晃 松浦康磨
三隅治雄 宮次男 八嶋正治
金沢文庫 京都国立博物館 宮内庁書陵部 常民文化研究所 水産航空
世界文化社 長母寺 東京国立博物館 東京国立文化財研究所 徳川黎明会
奈良国立文化財研究所 文化財保護委員会 平凡社 前田育徳会 陽明文庫

写真特集

平治合戦絵巻
西行物語絵巻
鎌倉仏画
南都復興
垂迹美術
鎌倉時代の庶民生活
鎌倉五山
鎌倉拝見
頂相と墨跡
武士の生活
おもなが美人の誕生
念仏踊
山伏神楽
蒙古襲来絵詞
物語絵
歌仙絵と歌合絵
鎌倉時代の名所絵
徒然草絵巻

愛と無常の文芸

源氏山と谷に囲まれた鎌倉をのぞむ



争乱期の影像

争乱の予兆

鴨長明は、もの心がついて、この世の中とか、人生について考えるようになって、かれこれ四十年あまりのあいだを回想して、『方丈記』の筆をとろうとすると、われながら世にもふしぎな事件をまのあたりにすることが、あまりにも多かったと思った。自分はいったいどういう時代に生きているのだろうか。

安元三年(一一七七)四月二十八日。風のはげしく吹きすさんだ夜、戌の時(午後八時)ごろ、都の東南の方角から出火して、西北にかけて延焼した。しまいには、朱雀門・大極殿・大学寮・民部省などにまで火が移って、一晚のうちに灰となってしまった。

火元は、樋口富小路といわれ、舞人を宿泊させてい

た仮小屋から火が出たというが、近江日吉神社の舞人が京に出て宿泊していたのであろうか、当時「日吉の神火」といわれていた。吹きまよう風向きに、あちこちと燃えうつり、扇子をひろげたように末ひろがり延焼していった。風の勢いで、吹きちぎられた炎が、飛ぶように、一町(約一〇〇メートル)も二町も越えて引火して、そのなかにいる人は、生きた心地もなかった。

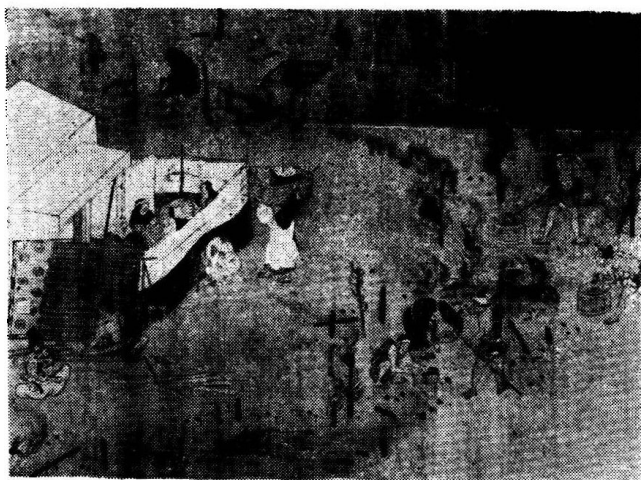
ある者は煙にむせて倒れ伏し、ある者は炎に目がくらんで、すぐさま死んでしまう。かろうじてのがれた者も家財道具を持ち出せず「七珍万宝」はそっくり灰となった。公卿の家が十六軒、京都のうちの三分の一が焼け、男女の死者数十人、馬や牛などは、どこで



八大童子立像
(和歌山県 金剛峰寺)

どうなったかわからなかった。この事件に対して長明は批判してみせる。どうせ人間のやることはみなばかげたもんなんだが、これほど危険な「京中」に家を建てるために、財産をつかい、あれこれと神経をすりへらすなんてことは、まったく愚劣なことではないか。

——長明二十三歳のときの体験だった。



京の大火 火災ほど目じめな災害はない。第二次大戦で戦災の体験をもっている人々には、長明ならずとも、その恐ろしさ、みじめさを思い起こすことができる。この絵は『春日権現験記絵』の巻14第6段の絵で、京の大火を描いたところ。焼け跡でわずかな焼け残り品を拾う人もみじめだが、すでに復興に着手する人々の姿はたのもしい。

また治承四年（一一八〇）四月のころ、中御門京極のあたりから、大きなつむじ風が起こって、六条辺まで吹きぬけたことがあった。この旋風の圈内にはいつている家々は、大きいのも小さいのも、みんな破壊され、そっくり平らにおしつぶされたものや、桁・柱だけが残ったものもある。家のなかの家財道具は、あるかぎり空中にまいあがり、屋根に葺かれた檜皮や算板などは、冬の木葉が風に乱れ飛ぶようだった。

塵をまるで煙を吹きたてるように飛ばすので、目もあけていられないし、ひどく鳴りひびくので、もの言う声も聞こえない。地獄に吹く業風という大暴風も、こんなものかと思われた。こわれた家を修繕しているあいだに、けがをしたり、不具になった者は、たいへんな数で、この風は南々西の方向、つまり市街地の中央のほうへ移動していった、多数の人たちの悲嘆の種となった。つむじ風はいつも吹くものだが、こんなにひどいのはただごとではなく、「さるべきもののさとし」（神仏のお告げ）ではないかと、長明は疑っていた。

——長明二十六歳のときの体験だった。

ところで、安元三年の大火と、治承四年の旋風を、

鴨長明は何かの前兆と見ていることは明らかである。いうまでもなく、源平争乱の前夜であり、古代王朝体制崩壊の前ぶれであった。しかし、『方丈記』はついにそのことに一言も言及しない。ふしぎなことに、多くの貴族も、有名な歌人も、文学作品の上で、この大動乱期を記録する者がいなかったという事実を、今日のわたくしたちは、どのように解釈したらよいのだろうか。

平家の三女性

偉大な叙事詩『平家物語』の登場を見るまで、宮廷サロンに参集する貴族や歌人、また隠者たちには、源平争乱をよそごとにして、花鳥風月を風雅のたよりとしていた。こうした大動乱期に埋没されたひとりの人生を、探り出すこともあながち無意味ではない。

ところで、藤原後期からしだいに生じてきた傾向であったが、文学のにない手がこの時代から、はっきりと変わった。文学は宮廷女房から、新しいにない手隠者へと引きつがれたのである。それは新しい時代の夜明け前であった。源平争乱は古代王朝政治を否定し、新しい秩序を求める時代の訪れを意味していた。

平清盛親子が熊野詣でに出かけた留守をねらって、平治元年(一一五九)十二月九日、源義朝と藤原信賴は突然クーデターをおこした。後白河院の寵愛をうけていた信西をたおすのに成功はしたが、急ぎ帰京した清盛の軍勢に反乱軍は大敗し、源平二氏の勢力は均衡を失い、清盛の時代を迎えた。仁安二年(一一六七)清盛は太政大臣となり、平氏一族の所領は天下のなかばに及び、栄華をきわめた。

平時忠は「この一門にあらざらん人はみな人非人な

落ち行く義朝 六波羅合戦で義朝方は敗れ、東国をさして落ちゆくことになった。これに従う者は数えるほどしかなく、その中にはまだ稚児鬻(ちごまげ)の金丸の姿がみうけられる。図は三条河原から落ち行く敗将義朝の一行である。『平家物語絵巻』六波羅合戦絵巻断簡



るべし」と豪語した『平家物語』というが、時忠の妹滋子は後白河院の寵を受けて高倉天皇を生んだ。滋子の姉時子は清盛の妻である。高倉天皇は九歳で即位し、生母滋子は院号を賜わって建春門院とよばれた。承安元年（一二七二）清盛の女徳子（十五歳）は高倉天皇（十一歳）の女御となり、翌年、中宮（のちの建礼門院）となった。

承安四年の春、中宮の御座所で、建春門院と清盛の妻時子とが、たまたまいっしょになったことがあった。建春門院の美しさは、この女院に仕えた健寿御前（定家の妹）の日記に、「愛敬こぼるるばかりとかや物語などに書きつけたるは、かやうなるにや」と書かれている。中宮に仕えていた右京大夫は身内の三女性が水入らずの団欒をするさまを眼前にして、ひどく感動した。女院をいよいよもなく美しく、また若々しいとし、中宮の召物が美しく映えあい、「今更めづらしく、いふかたなく」見え、御所のしつらい、人々の姿、「ことにかがやくばかり見え」たといひ、

春の花秋の月夜をおなじをり見る心地する雲の上かな

と歌によんでいる『建礼門院右京大夫集』。平家一門の栄華を象徴する瞬間であった。

美人薄幸

ちやうど、そのころ高倉天皇が法住寺殿（後白河院の御所）へ方違えの行幸をした。

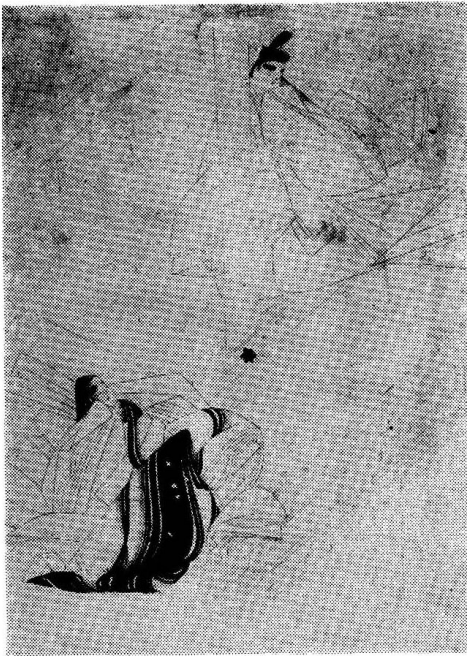
そのお供の女房のなかに「山吹の匂ひ、青き単衣、えびぞめの唐衣、白腰の裳きたる若き人」を健寿御前は見つけた。額髪の額にたれた様子や、その姿、よそおいなど人よりはことに若々しく美しく見えたので、人に問うと、小督の殿とのことだった。このときから健寿御前は小督と親しくなると、その日記にのしるしている。小督は『平家物語』に登場する悲恋の女性であった。

小督は平治の乱でたおれた藤原信西の孫であり、桜町中納言成範の女である。成範の兄弟に高野の明遍や安居院澄憲など、唱導で著名な者が多い。小督の悲恋が文芸化されたのも、こうした唱導家によるものであった。『平家物語』によると、高倉天皇を慰めるために、中宮のはうから小督を女房にさしあげたというが、これは信じがたい。ところが清盛の婿冷泉隆房が早くから小督に心を寄せており、隆房は和歌七十六首、長

歌一首から成る歌物語『艶詞』のなかに、天皇に召された小督への恋慕の情をめんめんと訴えている。

清盛にしてみれば、高倉天皇も冷泉少将も自分の娘婿であり、小督に二人の婿をとられるのは、おもしろくなかった。清盛のいかりを知った小督は、天皇に迷惑が及ぶのを恐れ、夜陰にまぎれて内裏をのがれ出た。

陸房卿艶詞絵 清盛の婿冷泉陸房が、小督に対するやるせない恋慕の情を、めんめんと書きつづった艶詞に、後世絵をそえて絵巻にしたのが、この絵である。柱にもたれて物思いにふける陸房には庭に映く桜花も目にはいらず、ただ小督との思い出のみ浮かびあがってくるのであった。『藤波絵草紙』



『平家物語』は天皇の嘆きを知った源仲国が、嵯峨のあたりをくまなく捜し求めるさまを、たいへん美しく文芸化している。小督はひそかに召されたのは事実で、治承元年皇女範子（のちの坊門の女院）の誕生をみた。

これを知った清盛のいかりのほどは、どのようなであつたらうか。小督は心ならずも尼にされ、二十三歳の若き身に、濃い墨染の衣をまとい、嵯峨のあたりに往んだという。嵯峨には祇王・祇女や仏御前・建礼門院の雑仕横笛、滝口入道なども、遁世の身を寄せた。嵯峨には聖寺で名高い清涼寺があつたのと、貴紳の別荘がいとなまれていたから、隠者が草庵を設けるのに適していた。西行も一時は嵯峨に住み、貴族や歌人と「たはぶれ歌」をつくっている。嵯峨の寺々や貴紳の別荘では、しきりと歌会が催され、隠者たちも呼ばれた。

草庵に住み、この世を無常視するにしても、生活の便宜を、寺院や貴族に求めねばならなかった。隠者となることによって、自由にこうした貴族と交渉をもち、歌や連歌の座をとにもすることを得た。貴族のほうもまた、別荘生活では一種の隠者として、文芸を楽しん

でいたのである。ところで、嵯峨に隠れ住んだ小督は、人々とながく交渉をもたなかったようで、『健寿御前日記』（建春門院中納言日記）に「二十余年のち、嵯峨にて行きあひたりしこそあはれなりしか」とするされている。小督は日本の全土をおおった兵火をどのように見すごしていただろうか。高倉天皇は治承四年（中御門京極のつむじ風のおきた年）、中宮徳子とのあいだに生まれた安德天皇（三歳）に讓位、一一年後の治承五年



肖像画をかく隆信 藤原隆信は廷臣としてよりも似絵の名手として名高かった。芸術家にありがちな熱情家の彼は、女性に対する関心もなみなみならぬものがあつたのであろう。この絵は隆信が後白河法皇のおおせで法然上人の真影を描いているところ。その真剣な顔だちには芸術に打ち込む人の態度がにじみ出ている。『法然上人絵伝』

（二二八）に没した。『平家物語』は小督のことあつてのゆえとしてゐる。小督は頼る人もないまま、平家滅亡後の新しい時代の息吹に老いゆく身を託していた。

資盛と右京大夫

ところで、わたくしたちは、戦争による悲恋の「女の一生」をみな

ければならない。実をいえば建礼門院（中宮徳子は安德天皇即位後、天皇の生母として院号を贈られた）に仕えた右京大夫である。その家系をたずねると、能書家藤原行成の五世伊行を父としており、代々、世尊寺流の能書家であつた。父伊行は箏の道にもすぐれていて、笛の家柄で雅楽寮に仕えた大神氏の女、夕霧と結ばれたのも、音楽がとりもつ縁であつた。夕霧はひとまわり以上も年上であつたから、伊行はよほど夕霧の芸に魅せられての恋仲であつたといえよう。右京大夫に多感な血が流れていたのは、このような芸統によるものであつた。父伊行は安元元年三十八歳の若さで没した。右京大夫の十九歳のときで、それより二年前、彼女は中宮徳子に仕えていた。

世間に多い戯れの恋はすまじと心にきめていた右京大夫が「のがれがたき契り」として、恋の喜びと、つ